

「罪喰いVII」

シン .. 主人公。罪喰い。世界中を旅している。

ヴィカ .. ルドヴィカ・マルケイ。矯正副長。父は陸軍中将のアドリアーノ・マルケイ。
ライモ .. ライモンド・フランチエスキ。看守長としてルドヴィカを補佐兼監視している。

ゴヨー .. 戦闘に飢えた男。強い。元陸軍歩兵部隊所属。

ネヴ .. ネヴィオ・グラッシ。看守。

BGM : 観客の野次

シン 「……つはあ。はあ。」

シン 「（くそ、じゅうしてこんな）とにかく…」

SE : 水鳥の鳴き声

シン 「…うまかった。」

シン 「（）の国は食の水準が高いな。景色も悪くない。気候も…じか懐かしい感じがして、心地いい。」

女 「キャー！」

シン 「？…なんだ。」

女 「ひつたくりよ！捕まえて！」

男 「邪魔だぞけえつ！…！」

SE : ぶつかられる音

シン 「いの……！」

SE : 運河に落ちる音

ネヴ 「一応確認だけさー、収監理由つて無許可での運河游泳と、ひつたくりの実行犯に協力したことで合つてる?」

シン 「合つてないわけないだろう。俺は巻き込まれたんだ。」

ネヴ 「でも調書に書いてあるんだよなー。運河游泳で周囲の注目を集め、相方の逃亡に協力したつて。」

シン 「俺は橋で、犯人に突き落とされた。被害者の女も見ていたはずだ。」

ネヴ 「その被害者女性が、君を共犯者だつて言つてるんだよ。まー決まっちゃつたものはどうしようもないから、諦めて償うんだね。じゃあ行こつか。」

シン 「おい、どこに連れて行くつもりだ。」

ネヴ 「地下の応接室だよ。お呼ばれされてるからねー。」

SE..歩く音

SE..ノック音

ネヴ 「失礼します。件の人物をお連れしました。」

ヴィカ 「ご苦労。下がつていいぞ。……よく来たな、罪人。」

シン 「冤罪だ。」

ヴィカ 「わかっている。君がひつたくり犯でないことは明らかなのだよ。」

シン 「は? それならどうして…」

ヴィカ 「面倒なことに、表向きには”共犯者”とされている。これは上の意向だ。しかし処遇は我々に一任されているのでね。君の働き次第では、この件について不問にしたいと考えている。」

シン 「…運河游泳も俺の故意ではないぞ。」

ヴィカ 「残念だが、それについては紛れもない事実だ。いかなる理由があろうとも、罰金は払つてもらう。しかし…君の所持金では少し足りないらしい。そうだな? ライモンド看守長。」

ライモ 「はい。不足分を換算し、1ヶ月の禁固刑となつてます。」

ヴィカ 「そういうことだ。他に聞きたいことは?」

シン 「…はあ。拘束されている間、衣食住は保障してもらえるんだろうな。」

ヴィカ 「それは君の頑張り次第だな。ついてきたまえ。」

SE..歩く音

ヴィカ 「君、仕事は? 調書には住所不定としか書いていなかつたが。」

シン 「…罪喰い。故人の罪を喰らい、引き受ける存在だ。旅をして回っている。」

ヴィカ 「兵役の経験は？」

シン 「ないな。」

ヴィカ 「そうか。では精々頑張るんだな。」

シン 「は？なにを」

SE：どんづと押される音

SE：檻が締まる音

ヴィカ 「ここ」で一戦やつて場を湧かせる。そうすれば、ひつたくりの件は不問として話を通す。”特別待遇”なら、上も納得せざるを得ないからな。うまくやれば、仕事も紹介しよう。」

シン 「要するに、誤認逮捕を表沙汰にしたくないから金で黙らせるつてことか。」

ヴィカ 「酷い言い草だな。悪い話ではないと思うが？」

シン 「断る。そもそもあんたたちの不手際だろう。」

ヴィカ 「残念だが君に選択の余地はない。生きて帰りたいなら死に物狂いであがくんだな。」

シン 「おい待て。命を張る気はないぞ。おい！……くそ。」

ライモ 「これを使え。」

シン 「…木の剣か。」

ライモ 「相手を殺すか戦闘不能にすれば試合終了となる。棄権もできるが、その場合は審議の

余地なく処刑だ。」

シン 「死人に口なしか。随分な待遇だな。」

ライモ 「相手も罪人、条件は同じだ。殺らなければ殺られるとだけ言つておこう。」

シン 「…戦うしかないという」とか。」

BGM：観客の野次

ゴヨー 「よお。お前さんが今日の相手か？」

シン 「ああ。そうらしいな。」

ゴヨー 「ひょろつちいなあ。少しは楽しませてくれよ！」

SE：木の剣がぶつかる音

シン 「つうー」

SE：壁に打ちつけられる音

シン 「へああ！……つはあ。はあ。」

シン 「（くそ、次まともに食らつたら本当に死にかねない。何か策を練らないと……）」

ゴヨー 「じうした。逃げるだけじや勝てねえぞ。」

シン 「（確かに、このまま逃げ続けてもスタミナ切れで殺られる。それなら……）」

ゴヨー 「お、正面突破か。そういうのは嫌いじやねえぜ！」

SE：木の剣がこすれる音

ゴヨー 「-」

SE：木の剣が折れる音

ゴヨー 「（……躰された。いや、あっちの剣も割れてるつてことは、受け流されたのか？）」

ゴヨー 「（）いつはもう使えねえな。」

SE：木が地面に放り投げられ落ちる音

シン 「（剣を捨てた。相手は拳で戦うつもりだろう。同じ手は二度使えない。次で決める。）」

SE：外套をバサッとする音

ゴヨー 「なんだ、俺と拳でぶつかり合つちゃくれねえのか。」

シン 「勝ち目のないこととはしない。」

ゴヨー 「ほう。つまり、勝算があると？ いいじやねえか。」

ゴヨー 「（欠けた剣に巻き付けた外套…ただの補強じやなさそうだな。なに考えてんだ？）」

シン 「ふんっ！」

ゴヨー 「（正面から来た？）」

ゴヨー 「おいおい、同じ手は通用しねえよ！」

SE：巻き付いていた外套がバサッと広がる音

ゴヨー「あ？」

SE：手（）たえのない打撃音

ゴヨー「（）の手（）たえのなさ…武器を手放した？外套が邪魔で見えねえがどうせ（）のあたりに…！」

SE：外套をバサツと振り払う音

ゴヨー「…あ？」

シン「動くな。」

SE：カラーンカラーンと木の剣が落下する音

ゴヨー「（）いつ、いつの間に…！」

シン「動けば首を斬る。折れた切つ先でも、頸動脈を切るには十分だろう。あなたの負けだ。」

SE：野次たちの歎声

SE：殺せコール

シン「……ふう。俺たちは見世物か。酷いものだな。安心しろ。あんたを殺すつもりは——」

ゴヨー「なめてんじやねえよ！…！」

SE：殴る音（大）

シン「……つ。」

ライモ「…起きたか。」

シン「いつ…（）だ、（）は。」

ライモ「医務室だ。貴様は試合に負けた。」

シン「なんで生きてるんだ。」

ライモ 「ゴヨーが貴様を殴り気絶させた。あいつは戦闘不能になつたやつに興味がない。

殺さなかつたのはそれが理由だろう。観客も沸いていたようだしな。」

シン 「（この頬の痛み…さつきの話は嘘ではなさそうだな。確かにこいつは、あの女に

付き従つていた…看守長、だつたか。）」

シン 「なぜあんたが監視している。部下はどうした。」

ライモ 「貴様に用があつたのでな。罪喰いなんだろう。」

シン 「そうだが。俺に何をさせるつもりだ。」

ライモ 「ここでは、闘技場で勝ち上がつた者を兵として起用している。彼らは一度死に、

別の人間として兵士に生まれ変わる。」

シン 「それがどうした。」

ライモ 「罪人としての過去は必要ないということだ。貴様は罪を引き受けるのが仕事だろ

う。」

シン 「俺が引き受けるのは故人の罪だ。そいつらは”世間的に死んだことになつた”だけだろう。」

ライモ 「では、貴様にとつての死とはなんだ。何を以つて死んでいると言える。」

シン 「あんたに話す義理はない。」

ライモ 「…そうか。」

SE・ドアが開く音

ヴィイカ 「ライモンド、そろそろ巡回を……っ！お前、起きたのか。」

シン 「ああ、ついさっきな。」

ヴィイカ 「よかつた…改めて、申し訳ないことをしたな。私はルドヴィイカ・マルケイ。

こここの管理人だ。ひつたくりの件は当然不問となつた。」

シン 「（なんだ？さつきとは雰囲気が…）」

ヴィイカ 「詫びと言つては何だが、仕事を紹介したい。引き受けてくれるか。」

シン 「…それなら、故人の元へ連れていけ。過去を捨てた兵士に用はない。」

ヴィイカ 「？何の話だ。さては私が来る前に何か話していたな？ライモンド看守長。」

ライモ 「いえ、特に何も。」

ヴィイカ 「嘘つけ。何か隠しているだろう。」

ライモ 「隠してません。」

ヴィイカ 「面倒くさそうな顔するな！ライモンド！」

シン 「……このまま暫く待つ。俺はここにいるから見張りでもなんでも好きにしろ。」

ヴィカ 「供える品はこんなものでよかつたのか？ただのトマトだが。」

シン 「なんだつていい。食い物じやないことも多いからな。」

ヴィカ 「そうか：お前はどうして、罪喰いをしているんだ。」

シン 「仕事だからだ。」

ヴィカ 「では、何を想つてこの時間を過ごしている？」

シン 「何も。故人に想いを馳せることもないし、依頼者に同情することもない。」

……そういうあんたはどうなんだ。ここに管理人なんだろう。」

ヴィカ 「私は……。」

シン 「……。」

ヴィカ 「……金になるんだ。こういうアンダーグラウンドな競技は金持ちに受けがいい。組織の維持に、金は必要不可欠だ。教会からの支援も受けられるしな。」

シン 「だつたら、俺なんかに頼らず免罪符でも」

ヴィカ 「それをよしとしない受刑者が一定数いる。人の思想とは難しいものなのだよ。」

シン 「……。」

ヴィカ 「いつまでここで待てばいい？」

シン 「明け方だ。」

ヴィカ 「では毛布でも持つてこさせよう。夜は冷える。」

シン 「この身にとりつけ給へと、恐み恐みも白す。……この男の穢れは俺が請け負った。身も魂も、潔白のまま天に召すことができるだろう。」

ネヴ 「お疲れー。もう運び出してもいい感じ？」

シン 「ああ。次の仕事は。」

ネヴ 「今はないつてさ。ほら、房に戻るよ。」

シン 「……この報酬を罰金の支払いに充てたいんだが。」

ネヴ 「俺に言われても。まー掛け合つたところで無理だと思うけどね。」

シン 「そつか。」

シン 「（まあ、出所したときに無一文で放り出されるよりはマシだな。）」

ネヴ 「ほら、着いたよ。今日からこの人と一緒だから、面倒起こさないでねー。」

ゴヨー 「おお？なんだ、あの時の兄ちゃんじやねえか。」

シン 「な……。」

ネヴ 「あれ、知り合い？」

ゴヨー 「ああ、闘技場でちよつとな。ゴヨーだ。よろしく。」

シン 「…シンだ。」

ゴヨー 「そんなにビビるな。ここで戦う気はねえよ。それに、次の試合で勝てば軍に戻れるからなあ。それまでの辛抱だ。」

シン 「戻れる? もともと軍にいたのか。」

ゴヨー 「ああ、陸軍の歩兵部隊だつたよ。気に食わねえ上官を殴り殺しちまつてな。このザマだ。」

シン 「そうか。」

ゴヨー 「あのクソ野郎、くだらねえ賄賂で手え引きやがつて。おかげで暴れ回る機会を一つ逃しちまつた: でまあ、その証拠を誰かさんが上に突き出してくれたおかげで、俺は生きたままここに収監されたつてわけだ。お前さんは?」

シン 「運河游泳だ。実際は突き落とされただけだがな。」

ゴヨー 「ああアレか! ツイでねえな! ははは!」

シン 「笑い事じやないんだが。」

ゴヨー 「まあそう言うな。こここのメシはそこそこまい。タダで寝泊まりできると思つて

気楽にしておけよ。」

ネヴ 「ちよつとー。外まで聞こえてるよー。少しは罪人らしい態度で過ごしなさーい。」

ゴヨー 「ははは! 気が向いたらなあ。」

シン 「(能天氣だ…。)」

ライモ 「あの東洋人を留めておくのはなぜですか。運河游泳の件も、その気になれば不間にできたでしよう。」

ヴィイカ 「交渉の材料だ。こちらの手にあつて損はない。」

ライモ 「彼は何も知りません。とても役に立つとは思えませんが。」

ヴィイカ 「あくまで保険だ。だが、怪しまれない程度に警護しておけ。」

ライモ 「…潰されますよ。あのお方に。」

ヴィイカ 「構わん。私は、私のやり方を貫くだけだ。」

ネヴ 「今日の業務終了ー。はーい、お疲れ。」

シン 「…はあ。」

ゴヨー 「近頃呼び出しが増えたな。」

シン 「いよいよ使われている気がする。」

ゴヨー 「ははは! まあ金が出るだけいいだろ。」

シン 「…監獄というのは、こんなに死者が出るものなのか。」

ゴヨー 「こここのシステムからして不思議じやねえが…たしかに多い氣がするな。昨日も殺れ殺れってコールが止まなくて困ったぜ。」

シン 「まさかあの遺体、あなたの仕業か。」

ゴヨー 「違えよ。骨のねえ奴を殺つたって、つまんねえだろ？」

シン 「同意しかねるな。…といえば、次勝つたら軍に戻るとか言つてなかつたか。もう何勝もしてるだろう。」

ゴヨー 「そうなんだよ。話が違うじやねえかつてキレたら、刑期を伸ばされちまつた。俺もいいように使われてるのかね。」

シン 「…。」

ゴヨー 「まあ、本氣で殺りあえるなら軍でもどこでもいいけどよ。でもこの監獄、ちょっとおかしいよなあ。キナの匂いがブンブンするぜ。」

シン 「…は？今なんて。」

ヴィイカ 「拘束時間が延びたと言つてている。」

シン 「ふざけるな。ここに留まる理由はないはずだが。」

ヴィイカ 「お前をとある事件の重要な参考人として保護することにした。くれぐれも外に出てくれるなよ。」

シン 「何の話だ。事件に関与した覚えは」

ヴィイカ 「話は以上だ。連れ出せ。」

ライモ 「はい。」

シン 「おい待て。まだ話が」

SE：ドア閉まる音

シン 「…はあ。なんなんだ。」

ライモ 「今日から部屋を移す。ついてこい。」

シン 「…今度は独房か？」

ライモ 「いや、普通の部屋だ。一人に違ひはないがな。」

シン 「それなら、移る前に房へ寄りたい。別れの挨拶ぐらいしてもいいだろう。」

ライモ 「…そうだな。手短に済ませろよ。」

シン 「ああ。」

看守 「捜せー！」

ヴィカ 「…で、まんまと逃げられたわけか。」

ライモ 「申し訳ありません。」

ヴィカ 「やはり正面から協力を仰ぐべきだつたな…。」

ライモ 「囚人番号540番、ゴヨーの処遇はどうなさるおつもりですか。」

ヴィカ 「脱走ほう助で刑期を伸ばせ。それよりも…吐いたぞ。ひつたくり犯の男と被害者は監視されていた。」

ライモ 「…。」

ヴィカ 「指示を出した人物はおおよそ絞れたが…このまま突き出しても尻尾切りだ。取引に関与した人物を洗い出して追跡しろ。繋がりを、必ず掴んでやる。」

ゴヨー 「…行つたか？」

シン 「ああ。巻いたな。しかし、どうして俺に協力する？ あんたにメリットはないだろう。」

ゴヨー 「俺もあいつらには腹たててんだよ。やたら殺せ殺せ命令してきてなあ…俺は体の

いい処刑人じやねえっての…それよりも、これからどうするんだ？」

シン 「まずは情報が欲しい。俺が重要参考人になつてているという事件について何か…」

ネヴ 「君たちなにやつてんの。」

シン 「！」

ネヴ 「あーステイステーイ。今はチクらないから。ね？」

シン 「（今はつて言つたな…。）」

ゴヨー 「じゃあ後でチクるんじやねえか。」

ネヴ 「あはは。たまには手柄にさせてよ。」

ゴヨー 「ん？ ああ、こいつは看守だが、何かと融通を利かせてくれる”不良看守”だ。

悪い奴じやねえから安心しろよ。」

ネヴ 「ちよつと言ひ方。今日の夕飯抜きにするよー？」

ゴヨー 「そんな権限ねえだろ。」

シン 「…あんた、俺が部屋を移される理由って知つてるか。」

ネヴ 「さあ。担当の房ならお達しがあるはずなんだけど…ないつてことはまあ、トップシークレットな事情があるんじやない？ それより…」

シン 「なんだ。」

ネヴ 「聞いた？ あのひつたくりがグルだつたつて話。」

シン 「初めて聞いたな。」

ネヴ 「俺も噂程度にしか知らないんだけどさ？ どうも君が巻き込まれた一件は、

犯人と被害者が繋がっていたらしいんだよ。」

シン 「何のために。」

ネヴ 「さあ？ 何か別の目的があつたんだろうね。」

ゴヨー 「なんでそんなこと知ってるんだ？」

ネヴ 「色々あるんだよ。立ち聞きしたり囚人から聞いたり。」

ゴヨー 「ロクでもねえな。」

ネヴ 「さつきから酷くなーい？ 僕何かした？」

シン 「（この話と重要参考人の件は、関係があると考えていいだろうな。共犯、別の目

的：犯人たちと面識はない。俺個人を狙つた犯行ではないだろう。それなら…）」

シン 「あの一件が何らかの理由で利用されたなら、まだ共犯者、あるいは手引きした人間がいるはずだ。」

ゴヨー 「心当たりもあるのか？」

シン 「ない。でも重要参考人として保護する理由にはなる。」

ネヴ 「なるほど。わかるような、わからないような。」

シン 「とにかく、直接説明を受けた方が早いだろう。俺を連れていけ。」

ネヴ 「え？ いいの？」

シン 「手柄にしたいんだろう。さつきの話が本当なら、手荒には扱われないはずだ。」

ネヴ 「いやいや噂だってば。そんな責任感じるようなこと言わないでよー。」

ゴヨー 「なら俺も一緒に行こう。それで上手いこと誤魔化してくれ。」

ネヴ 「うわ役目が重ーい。俺ただの看守なんだけど。」

ゴヨー 「手柄と引き換えだ気張れよ。」

ゴヨー 「なんだ？」

ヴィイカ 「今回の件でお前の刑期が延びる。覚悟しておけ。それと…闘技場の戦闘に、
　　極力参戦して欲しい。」

ゴヨー 「ほう。一体どうして。」

ヴィイカ 「お前は強敵を求めてる。故に、興味のない相手を殺めないだろう。その能力を

買いたい。」

ゴヨー 「随分頓珍漢なこと言うんだな。あれだけ殺せ殺せ言つてきたくせに。」

ヴィイカ 「なんだそれは。」

ゴヨー 「いや、それを言つたのは嬢ちゃんじやないか。まあいい。要するに殺すなつてことだらう?」

ヴィイカ 「ああ。私としてもあの闘技場で死者は出したくない。任せたぞ。」

ゴヨー 「おうよ。先に言つておくが、ヒリつくやつに会つちまつたらごめんな?たぶん殺るぜ。」

ヴィイカ 「…極力殺すな。そして、お前も死ぬな。」

ゴヨー 「ははは!俺は死なねえよ。じゃ、失礼するぜ。」

シン 「…俺を重要参考人として保護しているのは、犯人をおびき出すためか。」

ヴィイカ 「誰から聞いた。」

シン 「別に。考えればわかる話だ。協力を仰ぐなら正直に話せ。」

ヴィイカ 「…そうだな。お前には全て話そう。闘技場のシステムは知つてゐるな。」

シン 「ああ、勝ち抜けば軍に起用されるんだろう。」

ヴィイカ 「そう言われれば聞こえはいいが、実際のところは都合のいい処刑システムに過ぎん。最近は以前にも増して、軍にとつて不都合なものが投獄されている。」

シン 「軍の連中が仕向けていると?」

ヴィイカ 「ああ。見世物にすることで金を稼ぎ、異分子を消している。その遺体を教会に回収させ、ずぶずぶと…それを先導しているのが陸軍中将アドリアーノ・

マルケイ、私の父だ。」

シン 「あんた一人でどうするつもりだ。」

ヴィイカ 「一人ではない、部下もいる。だがあの悪魔を失脚させるにはそれなりの材料が必要でな。そこで目をつけたのが教会との取引、そして相次ぐ冤罪だ。この2つには関連性があつた。お前の件もそうだが…表で起きた事件が目くらましになつてゐる。」

シン 「俺がひつたくりに巻き込まれ、運河に落とされたとき、取引が行われていたということか。」

ヴィイカ 「可能性は高い。その証拠に、犯人と被害者の女は軍の何者かに監視されていたと吐いた。二人に接触した軍人はおおよそ調べがついている。そこから上層部に繋がる決定的な人物が洗い出せれば…あとは現場を押さえるだけだ。」

シン 「そこまで分かっていて、俺をここに留める必要があるのか?」

ヴィイカ 「…掴めていないんだ。その決定的な人物に、我々は迫り着けていない。こんなこと、あまり考えたくはないが…」

(ゴヨー 「随分頓珍漢なこと言うんだな。あれだけ殺せ殺せ言つてきたくせに。」)

(ゴヨー 「いや、それを言つたのは嬢ちゃんじやないか。」)

ヴィイカ 「我々の中に、裏切り者がいるかもしれない。」

シン 「そいつを見つけ出さない事には、事態が進展しないということか。」

ヴィイカ 「あくまで可能性の話だ。しかし、それなら合点がいく。お前が闘技場に放り込まれたのも…。」

シン 「なんだ。」

ヴィイカ 「いや、なんでもない。私は、この監獄を糺したいと考えている。本来あるべき、人が罪を償える場所へ戻すのだ。そのために協力してほしい。」

シン 「付き合つていられないな。俺の目的はあくまで解放されることだ。」

ヴィイカ 「わかつている。お前を危険には晒さない。ここを安全に離れられるそのときまで、少しでいい。力を貸してくれ。」

ライモ 「利敵行為は上に報告するぞ。ネヴィイオ・グラッシ看守。」

ネヴ 「看守長殿。一体何のことですか。」

ライモ 「白を切るか。その首、いつ飛んでもおかしくないと思えよ。」

ネヴ 「（あはは、おつかねー。元はと言えば取り逃がしたのは看守長でしょーに。）」

ライモ 「それからゴヨー、明日の対戦相手は殺せ。」

ゴヨー 「あ？ でもあの嬢ちゃんから殺すなつて」

ライモ 「例外だ。何としても殺せ。これは上からの命令だ。」

ゴヨー 「…命令、ねえ。」

ライモ 「軍に戻りたくはないのか？」

ゴヨー 「…。」

ライモ 「奴は手練れだ。備えろ。」

SE：足音遠ざかっていく

ゴヨー 「…はあ。わけわかんねえよ。なあ。」

ネヴ 「俺に同意を求めるでよ。」

（ヴィイカ 「我々の中に、裏切り者がいるかもしれない。」）

ヴィイカ 「（軍からしてみれば、私こそ裏切り者だ。何を馬鹿なことか…）」

ヴィカ 「入れ。」

ライモ 「失礼します。罪喰いの男は部屋に戻しました。」

ヴィカ 「ご苦労。彼は協力すると言つてくれたよ。」

ライモ 「そうですか。」

ヴィカ 「……。」

ライモ 「……何か？」

ヴィカ 「いや……確かに、彼を手違いで闘技場に連れ込んだのはボネット看守部長だつたな。」

ライモ 「はい。」

ヴィカ 「やつの周りを詳しく調べろ。もしかすると、我々の邪魔をする裏切り者が紛れているかもしだれん。」

ライモ 「承知しました。」

ヴィカ 「それと……君は、その……なぜ私に付き従うのだ。上官だからか。」

ライモ 「他に理由が必要ですか。」

ヴィカ 「いや……そうだな。それでいい。」

ライモ 「……私はすべてを尽くし、職務を全うするつもりです。ご随意のままに、この身を

使ってください。」

ヴィカ 「ライモンド……それなら、誓つてくれ。君だけは、私を裏切つてくれるなよ。」

ライモ 「……御意。」

ゴヨー 「裏切り者、ねえ。」

シン 「ああ、何か知らないか。」

ネヴ 「なーんで当然のようになーにいるのさ。一人部屋に移つたんだよね?」

シン 「許可は得ている。それで、情報は?」

ネヴ 「よく俺にそれを聞けたね?裏切り者だつたらどうするの。」

シン 「いや、別に……。」

ネヴ 「脅威でもなんでもないってこと!?俺ナメられてる?！」

ゴヨー 「そもそも嬢ちゃんの味方してねえだろ。論外だ論外。権力の犬め。」

ネヴ 「くうーん……。」

ゴヨー 「話を戻すが、情報ならあるぞ。確証はないがな。」

シン 「……本当か。」

ゴヨー 「ああ。というか、看守も一緒だつただろ。」

ネヴ 「え、そうだつけ？」

ゴヨー 「矯正副長の嬢ちゃんと話したあと、看守長に呼び止められたんだ。明日の対戦相手は殺せ、これは上からの命令だつてな。」

ネヴ 「それがどしたの。指示が変わらんのなんてよくあることでしょー？」

ゴヨー 「あいつは嬢ちゃんの部下だぞ？上官が真反対の命令出してんのに覆すわけねえ。」

ネヴ 「看守長の言う”上”が矯正副長を指してるとは限らないって。」

シン 「それはおかしい。ここの管理を任せているのはルドヴィカだろう。なぜあいつを通さない。」

ネヴ 「…確かに。しかも意見が割れてる。妙だね。」

ゴヨー 「この監獄は軍が管理してる。嬢ちゃんよりも上となると、それこそ軍の人間、

それも上層部からの指示になるだろうな。」

シン 「（軍上層部のやり方に不信感を覚え、反旗を翻したルドヴィカ。対立する看守長。

もはやこの監獄で、誰がどの陣営についているかを判断する方法はない。）」

ネヴ 「つまり、長いものに巻かれるなら看守長の言う事よく聞けよつて話か。嫌なるね

」）

ゴヨー 「俺は強い奴と闘えりやそれでいいけどよ…あの仮面の指示を聞くのはごめんだな。つまんねえことさせやがる。」

シン 「それなら俺につけ。ここから出たらあんたの望む”強い奴”を紹介してやる。」

ゴヨー 「本当か？どれくらい強いんだ？」

シン 「俺を担いで軽々と走り、銃で撃たれても平然と戦う。おまけに精神力が異常なほど強い厄介な男だ。」

ネヴ 「うーわ敵に回したくないやつー。」

ゴヨー 「ほう。俺とその男、どつちが強い？」

シン 「…さあな。闘つてみればいいんじやないか。」

ゴヨー 「いいぜ、興味が湧いた！絶対約束守れよ。」

シン 「ああ。無事に出られたらな。」

ヴィカ 「（犯人二人に接触した可能性の高い上等兵、彼の動向を監視してはみたものの…）」

ヴィカ 「そう易々と尻尾は出さないか。」

SE:ノック音

ヴィカ 「入れ。」

ライモ 「失礼します。報告書をお持ちしました。」

ヴィカ 「ああ、確認しよう。：施設内はどんな様子だ。」

ライモ 「特に変わりなく。罪喰いは独自に調査をしているようですが。」

ヴィカ 「私が許可した。君や他の看守も監視している。逃げだしあはしまい。」

ライモ 「そうですか。」

ヴィカ 「：8人か。今日は随分と多いな。」

ライモ 「先月宝石店で起こった立てこもり事件の実行犯と協力者、計6名が闘技場で死亡しました。内4名が同士討ち。他2名に勝利した元情報商の男が軍へ入隊を希望しております、現在審議中です。」

ヴィカ 「他2名は。獄中死としか書かれていないが。」

ライモ 「先日のひつたくり実行犯2名です。獄中で自害しました。」

ヴィカ 「なつ……そうか。」

ヴィカ 「（また一つ、手がかりを：）」

ライモ 「：少し休までは。顔色があまり」

ヴィカ 「問題ない。他に報告は。」

ライモ 「以上です。」

ヴィカ 「そうか。下がれ。」

ライモ 「：この部屋の長椅子は。」

ヴィカ 「？なんだ。」

ライモ 「あの長椅子です。確かに柔らかめの素材でしたね。」

ヴィカ 「ああ、そうだな。」

ライモ 「8名の診断書はこちらに置いておきます。お手すきの際にご確認ください。」

サインは必要ありませんから、横になりながらでも業務にあたれるでしょう。」

ヴィカ 「：そうか。」

ライモ 「午後の巡回前にお声がけします。それでは。」

SE:ドアの閉まる音

SE:カーペットを歩く音

SE:ソファに沈む音

ヴィカ 「……こんなことをしている場合ではないのだよ。馬鹿者め。」

ネヴ 「看守長殿。お疲れさまです。」

ライモ 「…何の用だ。」

ネヴ 「いやー。休憩がてらお話でもと思いまして。矯正副長も今はお休みになられてるんでしょう？」

ライモ 「いつから聞いていた。」

ネヴ 「たまたまですよ。場所を変えましょつか。」

ネヴ 「…亡くなつたんですねー。あの2人。」

ライモ 「ああ。それがどうした。」

ネヴ 「いやー、そんなに獄中が嫌だつたのかと思いまして。『闘技場にぶち込む予定はなかつたし、話してもいなのはずなんですがね？』って担当している看守が零してたんですよ。なんででしょーね。」

ライモ 「さあ。犯罪者の心理など知るか。」

ネヴ 「ですよねー。でも好都合じゃないですか。”勝手に死んでくれた”おかげで手間が省けたんじや？」

ライモ 「…何の話だ。」

ネヴ 「あはは！」冗談を、ライモンド・フランチエスキ准尉殿。」

SE:拔刀、剣がぶつかる音。

ライモ 「…腕は落ちていないうだな。次その呼び方をしたら貴様を闘技場にぶち込むぞ。」

ネヴィオ・グラッシ。

「肝に銘じておきます…それにしても、いいんですか？あなたが矯正副長と敵対してるって、あいつらにバレましたよ？」

ライモ 「そうか。邪魔するなら処分しろ。」

ネヴ 「難しいことを仰る。罪喰いのほうはまだしもゴヨーは無理ですよ。とても手が付けられない。」

ライモ 「そうか？”仲のいい”貴様なら、不意をつけそうなものだがな。」

ネヴ 「…勘がいいんですよーあいつ。まーぼちぼち頑張りますよ。ところで看守長。」

ライモ 「なんだ、まだ何かあるのか。」

ネヴ 「矯正副長を消すつもりはないんですか？」

ライモ 「…ない。」

ネヴ 「これまでどうして。」

ライモ 「彼女の血筋はここのトップとして都合がいい。彼女にとつても、我々にとつてもな。たとえ軍に歯向かおうとも、部下の力なしでは何もできまい。」

ネヴ 「ふーん。失礼を承知で申し上げますがね、上はそんなに甘くないですよ。抑えておけるのも今だけ。利用価値がなくなれば、すぐに消されます。」

ライモ 「……。」

ネヴ 「おつとこんな時間だ。では失礼します。さーて巡回巡回ー。」

SE：ノック音

シン 「いないのか？……む、鍵が開いている。俺だ。入るぞ。」
ヴィカ 「……すう。すう。」

シン 「（眠っているのか。この紙は……くそ、読めない。何かの資料か？他に手掛かりになりそうなものは…）」

ライモ 「動くな。」

シン 「！」

ライモ 「そこで何をしている。」

シン 「……ルドヴィカに話があつて来た。眠っていたので近くにあつた資料らしきものを眺めていた。」

ライモ 「寝込みを襲うとはいひ度胸だな。協力するんじやなかつたのか。」

シン 「妙な勘違いをするな。彼女とは協力関係にある。」

ライモ 「貴様の言動は信用に値しない。」

シン 「面倒な奴だな…それとも、俺が離反した方があんたにとつて都合がいいのか。」

ライモ 「…なぜそう思う。」

シン 「いややもんをつけられるときは大抵、何らかの思惑があるものだろう。目的は何だ。」

ライモ 「貴様に話すことはない。失せろ。」

シン 「断る。」

ライモ 「そうか。ならばここで死ね！」

シン 「つ！」

ゴヨー 「おらああああああああああ！」

SE：殴り飛ばされる音

ライモ 「ぐはっ！」

シン 「…ゴヨー。助かった。」

ゴヨー 「おう。嬢ちゃんは無事か？」

シン 「ああ、寝て いるだけだ。」

ライモ 「…なぜ貴様がここにいる。房に戻れ。」

ゴヨー 「外出許可は貰つて いるぜ。なあ？」

ネヴ 「どーしても散歩がしたいって言つてから、巡回の合間に仕方なくねー。あ、ライモンド

看守長。お疲れ様です。」

ライモ 「ネヴィオ、貴様…。」

ネヴ 「酷い顔ですね。何かありました？」

ライモ 「白々しい。貴様どういうつもりで…」

ヴィイカ 「何だ、ずいぶん騒がしい…なぜお前たちがここにいる。」

シン 「ああ、あんたに話が…」

ライモ 「今すぐそこから離れてください！その者は貴女の命を狙つています！」

ヴィイカ 「！」

シン 「おい、だからそれは勘違いだと」

ゴヨー 「危ねえ！避ける！」

SE：斬撃

シン 「つぐ！」

ゴヨー 「おい大丈夫か。」

ヴィイカ 「待て、剣を納めろライモンド！落ち着け！」

ライモ 「危険分子を野放しにするおつもりですか！」

ヴィイカ 「だが…！」

ライモ 「ネヴィオ看守、捕らえる。」

ネヴ 「はい。」

ゴヨー 「おい、なんでだよ。」

ネヴ 「いいから大人しくしててよ。シンも怪我してるんだし。」

シン 「…はあ、はあ…。」

ゴヨー 「…仕方ねえか。」

ライモ 「速やかに連行しろ。手負いの方は救護室に運べ。」

ネヴ 「はい。行くよー。ゴヨーはあいつらに連れて行つてもらつて。シン、歩ける？」

シン 「ああ…ルドヴィイカ。」

ヴィイカ 「…なんだ。」

シン 「そいつは…看守長は、ゴヨーに対戦相手を殺すよう、命じていた。あんたが殺すな

と命じた直後に、だ。」

ヴィイカ
「！」

シン 「上からの命令だと…看守長が言つたのを、この看守も、聞いている。だから…」
ネヴ 「…そろそろ行こう。手当てしないと死ぬよ。」

シン 「うつ…。」

ネヴ 「失礼します。」

SE：ドア閉まる音

ヴィイカ 「…今のは、本当か。」

ライモ 「襲撃者の戯言です。気に留める必要はありません。」

ヴィイカ 「そう、だよな。まさか君が、そんな…。」

ライモ 「…。」

ヴィイカ 「…なぜだ。なぜ、辻褄が合う。」

ライモ 「…。」

ヴィイカ 「私の指示が通らないのも、捜査が異様に進まないのも、彼が手違いで闘技場に連れて
行かれた件だつて…君なら、辻褄が合つてしまふ。」

ライモ 「…そうですね。」

ヴィイカ 「なぜだ！なぜ君なんだ！私を裏切つたのか！」

ライモ 「裏切つてなどいません。私は己の職務を全うしたまでです。」

ヴィイカ 「何を言つている。君は私の部下だろう！」

ライモ 「私は軍の人間です。貴女の部下である以前に、貴女の御父上の駒なんですよ。」

ネヴ 「容赦ないねーあの人。まあ内臓は無事だつたし、ラツキーってことで。」

シン 「う…。」

ネヴ 「しばらくは絶対安静だなー。結構血出ちゃつたし…あ、痛かつたら言つてね。
鎮痛剤足すから。」

シン 「…あんた、誰の味方、なんだ。」

ネヴ 「急になにー？別にとつて食いやしないよ？」

シン 「看守長の、あの反応…軍についているはず、なのに。なぜ、かき回している。」

ネヴ 「…俺は、俺のやるべきことをしているだけだよ。」

シン 「おい、どこに…つ…うう、くそ…。」

ライモ 「私は貴女の父君、アドリアーノ・マルケイ中将の命で、看守長の任に着きました。

貴女を監視し、この監獄を中将殿の管理下へ置くためです。」

ヴィカ 「ずっと、私をだましていたのか。」

ライモ 「貴女が父君に反抗すれば、中将殿は身内であろうと容赦なく消しにかかるでしょう。

そうなつては困りますから、いくつか工作をさせて頂きました。：騙していたと言われば、そう、なのかもしれません。」

ヴィカ 「私の身を案じてのことか？」

ライモ 「…そうですね。」

ヴィカ 「何故話してくれなかつた。」

ライモ 「話したところで貴女は信念を曲げないでしよう。」

ヴィカ 「…。」

ライモ 「それとも、全てを投げ出して私と一緒に逃げますか？」

ヴィカ 「！見くびるなよ。私は己の責任を投げ出すほど愚かな人間ではない。」

ライモ 「それなら、もうやめてください。本当に消されてしまう。」

ヴィカ 「構うものか！父の愚行を白日の下に晒し、この監獄を”正しく罪を償える場所”へ

還すこと。これが私の使命であり、戦いだ。心身を賭した、最大の願いだ。

君こそなぜわかつてくれない！」

ライモ 「…なりません。私にも為すべき」とが、守りたいものがあります。」

ヴィカ 「それなら、やはり道は違えている。」

SE：剣を抜く音

ヴィカ 「剣を抜けライモンド！」

ライモ 「嫌です。貴女を傷つけるつもりはありません。」

ヴィカ 「いいから剣を抜け！そうでないと…：決心が鈍りそうで、怖いのだ。」

ライモ 「…どうして。」

ヴィカ 「正直に言うと、私は君を好いていたよ。君が私を想うのと同じぐらい、私も君を喪いたくない。父上も、兄さまたちも、部下も…皆喪いたくはないのだ。でも、看過できない。父上が指揮し、君たちが賛同したその行動は、到底許されるものではないのだよ！だから私は」

ライモ 「……あ？」

SE：倒れる音

ライモ 「……ルドヴィカ矯正副長？しつかりしてください。ルドヴィカ矯正副長！」

ネヴ 「死んでますよ。見ればわかるでしょ。」

ライモ 「……なぜ、殺した。」

ネヴ 「マルケイ中将殿への明確な反逆宣言。そしてライモンド准尉に向けられた切つ先。被害を最小限に抑えるための最適な措置だと思いますが？」

ライモ 「未遂だろう！殺さず捕らえて聴取をすべきだ！」

ネヴ 「何寝ぼけたこと言つてるんですか。相手は軍に戦争吹つ掛けてきたんです。さつき全部話していたでしよう？これ以上聞くこともありませんよ。」

ライモ 「しかしつ……くそつ、どうして……。」

ネヴ 「どうして？そんなの決まつてるじゃないですか。マルケイ中将が”彼女を切つたから”ですよ。」

ライモ 「……は？」

ネヴ 「聞こえなかつたんですか？彼女は用済みになつたんです。というか、血縁に反乱分子がいると自分たちまでとばつちり受けるから処分してくれつて。」

ライモ 「なんだそれは。聞いていないぞ。」

ネヴ 「そりやそうでしよう。これは俺が受けた任務ですから。あなたが彼女を庇つていたことはぜーんぶ筒抜けでしたし、当然じやないですか？」

ライモ 「……。」

ネヴ 「じゃ、運ぶのでそのへんのお掃除お願ひしますね。報告書はまた後ほど。」

シン 「……ん。」

ライモ 「……。」

シン 「な、なんであんたがつ……つー！」

ライモ 「動くな。傷口が開く。」

シン 「……殺しに来たのか。」

ライモ 「いいや。頼みに来た。」

シン 「頼み？何の冗談だ。」

ライモ 「傷が治つてからで構わない。もう墓の下だが、弔つてくれないか。」

シン 「弔うつて、誰を。」

ライモ 「ルドヴィカ矯正副長だ。先日亡くなつた。」

シン 「本当にこれでいいのか。金具のようだが。」

ライモ 「ああ、他の遺品は全て押収されてしまった。彼女が運ばれる直前、辛うじてむしり取つたのがその鉗だ。」

シン 「…以前、俺にとつての死とはなんだと聞いたな。」

ライモ 「ああ。」

シン 「俺にとつての死とは、肉体の死だ。だからこの仕事を受けた。」

ライモ 「そうか。」

シン 「俺も聞きたいことがある。あんたは罪人たちの過去を俺に請け負わせようとしていたが、それはなぜだ。たとえ潔白の兵士に生まれ変わつても、戦場に出れば人を殺めることになるだろう。」

ライモ 「…あれば建前だ。本当は、彼女を救いたかった。責務を捨て、自由に生きる道を…新しい人生を、歩んでほしかつた。…しかし、彼女はそれを拒んだよ。全て私の独り善がりだつたと気づかされた。」

シン 「…。」

ライモ 「高潔など、身を滅ぼしてまで守るものではないと、そう思つていたのに…今はそれすら愛おしい。彼女は最期まで美しく、強いままでこの世を去つた。彼女自身はそう思つていなかつたが。」

シン 「だから頼んだのか。」

ライモ 「ああ。せめてもの気休め、私のエゴだ。責任は生きている人間が負えればいい。これからは矯正副長でも、陸軍将校の娘でもない一人の人間として、安らかに眠つて欲しいと、心から願つている。」

ゴヨー 「おう、戻つたか。もう荷物まとめて出るんだろ?」

シン 「ああ、まあ。」

ゴヨー 「出る前に教えてくれよ。例の強い奴。」

シン 「そういう約束だつたな。待つていろ、紙に書いてやる。」

ゴヨー 「助かるぜ。俺もようやく自由の身だからな。」

シン 「軍に戻るのか?」

ゴヨー 「いや、やめた。今回の件で色々めんどくせえと思つたんでな。」

シン 「まあ、そうか。ここなら新しい就職先も見つかるかもしない。」

ゴヨー 「本当か？ますます楽しみだな。」

シン 「そういえば、あの看守はどうした。いないようだが。」

ゴヨー 「それがよお、あのあと消えちまつたんだ。看守長も変わつちまつたし、

なんかあつたのかね。」

シン 「…かもな。世話になつた。」

ゴヨー 「おう、達者でなあ！もう運河に落とされるんじやねえぞ！」

シン 「ああ、気をつける。」